

近年の日本では、幼稚園にも保育園にも行かず小学校へ上がる子どもはまれです。私自身はそのまれだった子ども1人です。

幼稚園や保育園には行かなかったものの、近所に住んでいた同じ年頃の子ともたちと、ときにはけんかもしながらよく外遊びをしていました。私が住んでいた住宅街のすぐ近くに外遊びにうってつけの空き地があり、よく戦争ごっこをして

いた記憶があります。また畑や小川もあって、春には菜の花が咲き、チョウやカエルなどの小動物もいました。時間はかかりますが、歩いて行けなくはないところに魚が取れるぐらい水が澄んだ川があり、水遊びをしました。

このように、私が幼少期から青年期だった1960年代ぐらまでは、自然の中での集団遊びが幼児期から小学校の低学年ぐら

での時期の夢中になれる遊びであり、幼稚園や保育園に行かなくても経験できていました。しかし現在は、1人で夢中になって遊べるゲーム機器の登場など、生活と子育てを取り巻く環境が激変したために、子どもが育っていく上で必要な環境を意図的に作らなくてはならなくなりました。

北海道は今でも豊かな自然に囲まれています。自然がありさえすればいいというわけではなく、自然を媒介にした友だちとの関わり、つまり社会的関係が重要です。自然が豊かで隣の家まで歩いては行けないような過疎地が望ましい環境とは言えず、家の前に国道や鉄道があるようなところでは、どこでも自由に外遊びをするのは危険で、何らかの手立てが必要です。

つまり幼児期から小学校の低学年ごろまでは、集団遊びとか群れ遊びと言われ

る遊びの中での社会的な関係を通して、健やかな成長や発達が可能であるということなのです。いじめや不登校と言った言葉が広まるのは、私の子ども時代が終わった、ずっと後のことです。

名寄の話ではありませんが、ある幼稚園が園の特色として、この集団遊びに力を入れていたのですが、地域の親たちにはその良さがなかなか理解されず、園児集めに苦労していました。

「あの幼稚園はただ遊ばせておくばかりで、ちゃんとした教育をやってくれない」と思われていたわけです。でもこれは誤解であり、知識や技能だけを教えることだけが教育ではないし、集団的な遊びをすることによって、結果的に知識や技能を習得することができます。

これを「学び合いによる教育」と呼びます。集団的な遊びは組織的な遊びへと発

展します。もっとおもしろい遊びをするために、みんなが調べたり考えたり相談したりすることで、それが頭の中だけの理解ではない、経験に裏付けられた知識、技能として身につけていくというのが、幼児期にふさわしい学びであり教育なのです。

遊びと呼ぶのは、それが自発的で楽しい、おもしろい活動だからで、知りたい、できるようになりたいといった目的のある活動は、「遊びの活動」であると同時に、「学びの活動」でもあります。集団的な遊びが集団的な学びにもなるということです。幼児期は日常生活の中で自然に知識や能力を獲得していく発達の段階なので、遊びの重要性は幼稚園でも保育園でも変わりはありません。



**大学図書館へようこそ！**

春休みに入り、学内は静かです。図書館では年度末の作業として、蔵書点検や雑誌の製本、指定図書の新規、各種行事の計画などの打ち合わせを行い、新年度に備えています。

**＜開館時間と休館のお知らせ＞**

4月3日(火)まで 9:00~17:00  
4日(水)から 9:00~21:00  
※3月12日(月)~14日(水)は休館  
※日曜・祝日は休館



**大学図書館にはこんな本があります**

～～保育や遊びに関する図書～～

- 『集団遊びの発達心理学』 田中浩司/著 北大路書房
- 『遊びこそ豊かな学び』 今井和子/著 ひとなる書房
- 『かかわりあって育つ子どもたち 2歳から5歳の発達と保育』 西川由紀子/著 かもがわ出版

**◆問い合わせ**

名寄市立大学図書館 ☎ 01654②4199(内線4201)